

四條畷市教育フォーラム 2014(H26. 2. 1)



大阪大学大学院 志水宏吉教授 講演抄録

テーマ「学力を育てる Part II」

〇学力を育てるアプローチ

皆さんこんにちは。宜しく申し上げます。昨年に引き続いて2度目とご紹介頂いたところですが、2日前ですが、私は生駒山を越えた奈良市にお呼び頂きまして、先生方の人権・学力の研修をしてきましたけれども、昨年ここでお話させて頂いたような、つながり格差や学力の樹とかそういう話をさせてもらいました。主催者が想定していた以上のかなりの人数が来られて、400人ぐらいが入るホールでしたが立ち見が出るぐらいの、ちょっと売れっ子の歌手になった気分でした。普段はそんなことはあんまりないんですけども、非常に熱気をもって、奈良の先生が話を聞いて下さいました。どこでも考える課題は同じなんだなと思って今日に至っています。四條畷では、パート2ということで、前より具体的な話を聞かせて下さいとご要望を頂きました。その要望にちゃんと応えられるかどうか自信はありませんけれども、与えられた時間お話をさせていただきたいと思います。

私の話の後に、秋田から来られている多賀谷先生に主役として登場して頂きます。私は、多賀谷先生とは20代後半ぐらいから共通の学問をやっていたこともありまして、知り合いでここまでこさせて頂いております。今回、四條畷市教育委員会から秋田からどなたかをお招きしたいと聞かれましたので、多賀谷先生をお誘いして来て頂きました。昨日は、四條畷市内の小中学校を訪問して頂いておりますので、その感想も聞かせて頂けると思います。ご参加の方は、今日聞かれたことを新たな刺激にして、四條畷の子どもたちのために役立て頂きたいと思っています。

さっそくですけども、お手元にレジュメと資料を用意させて頂きました。レジュメに沿ってお話したいと思います。先ほど、つながり格差についてご紹介頂きましたが、私にとっての物語の初めは2007年の12月でした。今から、足かけ6～7年前のことです。その年に、小中学生対象の第1回全国学力テストが開始されました。開始というよりは正確に言いますと再スタートになります。45年前～50年前、昭和30年代～昭和40年代ころに全国テストがありました。そこからずっと全国テストは実施されませんでした。全国の全容がつぶさに明らかにされる機会はこの間ありませんでした。

しかし、2007年5月に全国テストが実施されて、12月に結果が出てきました。新聞を見てびっくりしました2つびっくりしました。1つは、トップが秋田県・福井県であったこと、特に秋田県にはびっくりしました。そののちに、秋田の高学力を探るために、私は5年間で10数回秋田県に行かせて頂きました。最初に秋田県教育委員会を訪問した時に、県の方たちもトップになるとは思っておらずびっくり仰天されたとのこと。福井県のほうは、今年1年間、福井を調べるプロジェクトをやっておりまして、福井にはトータル15泊ぐらいはしたと思います。その成果はまとめつつありますが、福井は昔から上位なんです。そして今日まで50年間ベスト3を維持しています。それがなぜかということも興味深いですが、それは後で述べます。ともかく、日本海側の寒冷地といわれるところが学力テストをするとトップになる。

2つ目に驚いたのが、われらの大阪府の結果がよろしくなかったということです。私は30代後半から40代前半にかけて東京におりました。そして、2003年に大阪大学に戻ってきて学力調査をやっておりましたので、大阪はちょっと厳しいのちがうかと思っていましたが、結果は下から2番目か3番目でした。しかし、その後6年間で小学校は、府全体の数値が上がってきています。しかし、中学校全体の数値がその段階からほぼ変わらない状態の苦戦している状態が続いています。小学校の先生が頑張ってるから、中学校の先生がさぼってるからではありません。両方頑張っていますが、中学校はなかなか成果が出にくいということです。大阪だけではなく。沖縄県、高知県、北海道も同様に推移しています。希望の兆しとしては小学校が上向いてきているということです。もう何年かしたら、中学校も浮上するかもしれません。

何年か秋田に行きましたが、多賀谷先生は今年度から八峰町に赴任されました。八峰町は、秋田県教育委員会で話を聞かせて頂き、いくつか紹介して頂いた自治体のひとつでした。八峰町は、秋田県の一番北。青森県との境にあります。多賀谷先生の話を取りますが、八峰というのは、平成の大合併でできた町で、八森町と峰浜村が合併してできた町です。森と浜しかない町です。私たち阪神間をうごめいている我々からすると風光明媚な、あまり人がいない町です。町には塾もありません。そういうところが全国でもトップクラスの、その中でも自治体レベルでトップに位置していました。

それはなぜか。第一印象でしか言えないんですけども、2つあります。1つは、八峰町をよく知っておられる地域の名士をお伺いしたときに、「ああ、なるほどな」と思ったことです。人間関係が豊かに残っている、つながりが維持されている。これが福井県や秋田県です。こういうところでは押し並べて子どもたちの学力の底上げが効いている。しかし、つながりがゆるい、切れかけている地域は、都市部ですが、特に大阪です。相対的にいうと、人々のつながりが秋田県は続いているのではないかと思うのですが、客観的に見て、自治体のつながりが豊かにのこっているところと切れかかっているところがある。後者のタイプの学校で学力は明らかに低いということがわかっています。学校生活や地域全体の中で子どもたちの人間関係の豊かさが、子どもたちの学力に非常に跳ね返っているという現代的な特徴があるのではないかと思ったわけです。八峰町に行きますと自然に恵まれていて、人々のつながりも豊かである。

では、人間関係のつながりが豊かであれば日本国中学力が高いのかということではありません。たとえば沖縄県。沖縄のある離島を訪問したときに、例えば秋田県で生えている植物と沖縄県で生えているさとうきびとは全然違いますが、地域とのつながりもあり人間関係も豊です。でも学力には違いがある。沖縄県のある校長先生の話聞いた時に、島の人たちが、子どもたちに体力と人間性を鍛えることを期待しているので、我々はそれに応えようとしてやっている。逆にいうと、ペーパーテストが少しおろそかになっているかもしれないというお話でした。

対象的に八峰町のある方の話をきくと、うちは教育の町でやってきた。歴史をたどりますと、歴史的に町のエリアで鉱山が掘り出されて、明治維新になったときに東京から会社が進出して、そこで殖産興業のための工場を作って、途中から職員層・技師層がやってきました。村はずれに住宅を作って、そこで仕事をするんですが、夕方とか休日に例えばテニスをしたり、ベランダでコーヒーか何かをすすりながら楽しそうにしている光景があったんですね。村人は、いい暮らしをしてるなと思ったわけです。厳しいくらしでしたから、なんとか子どもたちや孫たちにはいい暮らしをしてほしい、安定した仕事をしてほしい。そのためにはネクタイをつけた仕事をしてほしい、そのためには学門をつけなければならない。そのためには旧制中学や高等女学校、今でいうと大学ですね、に行かせたいということになったわけです。戦後に秋田大学の教育学部ができたときに、村から2人ずつ優秀

な若者を送って奨学金を与えた。小さな村ですから、何人かの先生が帰ってきたらたいしたものですよね。そこで村の人たちと若手の教員とが一緒になって教育の村づくり町づくりを進めてきたという話です。

地域住民が学校での学習を大事に考えている。だから塾がなくても大丈夫という話を聞きました。地域の願いが高い学力を支えているということがいい点です。もう一つは、授業を見てびっくりしました。小学校の6年生の算数がびっくりしたのですが、たぶん秋田の中でも知られた教員と感じますが、ともかく校長先生につきそわれて、たまたま6年生の授業をやっているのを見ました。ぱっと見ると教室では子どもたちが立ち歩いておしゃべりをしていたんです。何も説明を受けなければ、学級崩壊かと思ってしまうようなイメージです。学び合いの授業だということでした。学び合いというのは日本国中で大きなスローガンになっていると思います。四條畷でも同じだと思います。受け身の聞きっぱなしの授業ではなく、グループやペアでやりましょうということです。

我々の常識では、学びあいというのは、まず自分で考えて、それからグループで考えて全体で発表しましょうとなります。八峰町の小学校の教室では、そうではなくて、自力解決ですか、それを何分かやったら、もう自分の答えをもって仲間と交流する、そして全体で交流する場面というのがあります。時間配分でいうと最初10分ぐらいは自分で考える、次の20分でみんなと交流する、外から見るとワイワイガヤガヤやっている。最後の20分ですか、算数の授業ですから、私はこういう式を立ててこういう工夫をしたと代表の子が2～3人が発表するんですね。

これも今から思うとわざとやったのかなと思うんですが、何人か指名した子の一人の女の子が、説明できずに口をもごもごしてしゅんとなっているんですね。私たち数人で見ていたら、ちょっと女の子が涙ぐんでつまってしまった。その後、先生がクラスの皆に向かって、「この子が泣いているのは君らの責任とちがうか。学びあいというのは全体で高まっていくことだと約束したじゃないか。この子が泣いているのは、君らのやり方がおかしかったからとちがうか」ときつく指導されていた。私たちはびっくりして身が引き締まる思いをしました。

その学校の6年生のその年の小学校算数のB問題の結果は、秋田の中でも群を抜いて高い成績でした。さらにこの話にはオチがありまして、後でわかったのですが、その私たちが訪問した小学校は、その年に過疎地になった3つの小学校が合わさってできた学校だそうです。テストは4月の末にありますので、3校の5年生が新しい小学校の6年生として数週間してこんな結果が出てきたということです。大阪的にいうと、集団を作って授業が落ち着いてきて学力が上がってくるというイメージですが、集団ができあがる前に日本で最高水準の結果が出ているのはすごいなということです。それを支える地域の願いがあり、実際に授業の力があるのだなということです。完全にまいったなと感じた次第です。

○秋田・福井・香川に共通する要因

ちょっと前になりますけれども、日本のいろんな地域を我々グループで歩かせて頂いて、日本の学力の問題の現状というものを本にまとめました。私は秋田県担当で論文を書きました。その時に、秋田だけではなくて具体的にいうと秋田県、福井県、香川県ですけれども、全国テストで上位になった秘密、なぜそうなんだということを本にまとめた時に5点にまとめたんです。どれもわかりやすい話です。今の日本で学力の高い県に共通する特徴です。第1番目は、自治体規模が相対的に小さい。人口が少ない県だということです。人口が多い県で上位のところは、あまりありません。強いていうと東京都が中の上ですが、だいたい上位県は、われわれの言葉でいうと田舎です。2番目には、地域家庭の安定性。

これはもうずっと言われていることです。秋田でも福井でもそうです。3番目は、教育委員会と学校との一体感の強さです。委員会と学校現場が一体となっていてやっているところは強い。逆に言うと、県教育委員会と市教育委員会との間に距離がある、相互不可侵でやっている、いろんな事情があると思いますが、そういうところはちょっとしんどいんじゃないかな。調べてないからわかりませんが、教育委員会と現場がスクラムを組んでいるところは強いということです。4点目は、学校現場における熱心な授業研究、教科指導。先生方が授業をよりよくするためにと考えて日夜奮闘努力している。これは、大阪もそうなんだと思いますが、大阪の場合は学習指導に入る前の生徒指導にかけるエネルギーが多くなりますので、気持ちとしてはやりたいができないという現状がある。しかし、秋田県や福井県は、エネルギーを傾けられる環境的要因に恵まれているということです。5番目は、まじめな教師と子どもたち、というふうなまとめになります。勤勉とか、素直とか真面目という形容詞があてはまる子どもたちあるいは先生方が大部分を占めます。これも、大阪が不真面目という話ではありません。設定された目標に向かって、全員で一つになってやれるような形になっているというニュアンスです。

われわれのグループ以外にも、同じような仕事が行なわれていて、我々の目から見て注目されるのが、もともと大阪教育大学で同僚だった、その後早稲田大学に行った、田中博之さんが、秋田と福井を頻りに訪問して比べてみるという仕事を去年と一昨年ぐらいにやられました。そこで出てくる共通点も私たちが言ったのとはほぼ同じです。唯一の違いとして秋田と福井の違いを挙げているのがあります。参考になると思いますので言います。秋田の特徴としては、授業中の子どもの対話力や発表力の高さ。これが、福井にはあまり見られなくて、秋田に見られる顕著な特徴。対話力や発表力の高さ。私の感想と全く同一です。授業で子どもたちが活発に対話している、自分の気持ちを言える、相互に批評し合える。これは、失礼ですが、福井より秋田のほうが上かなと思います。

逆に秋田の子にはない福井の子の特徴を言いますと、授業中の子どもの集中力、規律、礼儀の高さを挙げておられます。これも、まったく我々が感じたことと同じです。ということは、教育学をやっていたら誰が見ても行動面の特徴は同じなんかなということです。秋田は、授業やと。福井は子どもたちを鍛える規律であったり集中力の高さであると。そのコントラストが言われています。

そこから我々が何を引き出すかというときに考えて頂きたいのは、日本の小中学校で全国テストにA問題・B問題ありますね。私なりに解釈しますと、秋田県ではB学力を伸ばすための授業が全面的に展開されているということです。なので、授業をどう工夫したらいいのかと思われている方は多賀谷先生の話聞いて、機会があれば秋田県の学校を訪問しますと一目瞭然じゃないかなと思います。では福井はどう位置付けたいかということ、A中心、基礎基本に徹底的にこだわる。授業を見た時に、あまり何も変わったところはない、新しくない。もっと積極的に言うと、王道をそのまま行っておられる。その子どもを鍛える度合いがすばらしいので、成果がBのところにも溢れてきている。砂山を作るイメージで、底辺の土台が途方もなくでかいので、トッピングされるものもおのずとたまっていくということです。福井は、土台を広げているので、おのずと積み上げが効いている。そんな感じがします。ということは、大阪の先生に置き換えれば、日々の学習習慣の育成とか宿題とかをみっちりがっちりやると、そして、授業の中で子どもたちの意見を引き出す、相互に聞きあう、あるいは活気のある授業、両面作戦でやって頂くといいのではないかな。まとめると、そういうことになります。

○大阪府茨木市の取組みから

次に、大阪の話を見せて頂きたいと思います。我々にとって、秋田県・福井県はある意味ユートピアです。ユートピアの話ばかりを聞いてもなと思われても困りますので、大阪府茨木市の取組みについて話します。茨木市は、私たち大阪大学のボーダーラインですね。阪大からちょっと歩くと茨木市です。私の研究した10年来、茨木市教育委員会あるいは茨木の学校に大変お世話になっています。茨木市が大変成果をあげているというのが次のお話になります。市町村の方をはじめ議員の方も大勢来て頂いておりますので、どんな取組みをしているのかをお伝えしたいと思います。

茨木市は、6年ほど学力向上プランでやってきました。今年が第2期の3年目になります。平成20年から3年間で第1期、次に第2期が終わって来年から第3期、茨木市学力向上ステップアッププランとありますが、そういう段階です。第2期の2年目と3年目に突然右肩上がりに結果が出ていることが文部科学省に注目され、それに基づいて発表したのをNHKや朝日新聞が注目し、年末年始に2日間報道されました。データを見て頂きたいのですが、お手元の冊子の裏面を見て下さい。

ちょっと印刷が消えていて見にくい部分がありますが、プラン22・ステップアッププラン25の成果2を見て下さい。正答率の推移が、小学校・中学校とも右肩上がりになっています。特に平成25年の結果が跳ね上がっています。これは明らかに、5～6年間の積み重ねがここにきて、爆発的に数値として出てきたということです。今の中3が小5の時から、全市一丸となってやってきました結果です。何をやったか、どうしてこうなっているのかと言いますと、この成果2の数値を見て頂くと、私は統計をよく扱いますので確かに言えると思うのですが、個々の学校、個々のクラスでこういう右肩上がりになることはしばしばあります。しかし、茨木市は人口が26万人～27万人です。学校数は、四條畷の4倍～5倍はあるかもしれません。全部の学校の数値がこれだけ上がるということはないのです。いい学校、もうちょっと頑張ってもらいたい学校、押し並べて上がっている、我々の目から見たらすごいことです。

第一に、学力が上がることはもちろんですが、茨木市はもっと広い学力観を設定しています。学力プラス4つの力を市全体で設定されたという特徴があります。A3の裏面を見て下さい。裏面の左上に、子どもたちに育みたい4つの力の指標があります。茨木独自にそこにあります、「ゆめ力」「自分力」「つながり力」「学び力」という4つの力を打ち出したということです。ただ理屈として打ち出すだけではなくて、そこに子どもに対する質問紙調査の項目が並べてあります。このアンケートの結果を分析するのも可能にしたのです。

「ゆめ力」は将来を展望する力です、「自分力」というのはセルフコントロールをする力です、「つながり力」というのは仲間とつながる力、人とつながる力ですのでコミュニケーション力、「学び力」は学習習慣と言い換えることができます。

単に学力を上げるだけのためではなくて、学力のベースになる力があるだろうと、学校教育活動全般の中でそれぞれに手を入れようと、この根っこの部分を鍛えることによって青果物というか果実となる学力も結果として上がるんだというアプローチをとられたというのが一点目の特徴です。学力を上げる時に、学力だけでなく根っこの部分を考えるということです。

二番目には、これは私もアドバイスをしたりして採用して頂いたのですが、単に市の平均値を上げるということではなくて、テストの正答率80%以上の上位層、40%以下の下位層をどう増やし、減らせるのかということの目標設定をしたということです。平均値ではなくて、上位層を伸ばすことも大事、でも下位層を減らすことももっと大事ということの目標設定をしたということです。それが成果3のところですか。これも、最初は私が見

た時は驚きでした。成果3、左下のグラフのさらに左側は小学校です。全国ベースで上位層が100人いると仮定した場合に、茨木市の小学校には初年度には109人高得点層がいた。既に全国を上回っていた。それが6年後には127人まで増えているということの意味しています。逆に、しんどい層はもともと93人いた。全国よりはちょっと少ない。これを減らしましょうということになって、73人まで減らした。中学校は、クロスしていますので割愛します。学力の問題を考えると、しんどい層をどれだけ減らすかが私が大事にする考えですが、これを市全体として各学校が目標設定して取り組んだということです。

特徴の3番目は、見える化を図った。見える指標を作る。冷たい感じがしますけれども、努力をして結果が出てきますから、現場としては励みになる。「頑張ったら上がるやないか」という話です。実感していることが数値で表れると、モチベーションになります。保護者の人にも地域の方にもアピールできます。

4番目は、これを実行していくときに、どの市でもあるかもしれませんが、学力担当者会議を、学力の担当の方を決めて、一堂に会してもらって年に8回ずつやっています。私はアドバイザーとして出られるときに出ています。それで取り組みを進めてきました。具体的に何をしたのかということは、A3版の真ん中にあるステップアッププラン25で実施している事業を見て下さい。これは、市が公表しているものですので数値も出ていますね。このステップアップ学力向上プランで、市として総額1億9千万円を出しています。私は行政の間ではありませんのでピンときませんが、極めて大きい額だと思います。自治体の財政基盤が豊かでないところまでできないと思いますが、茨木の場合は教育の町だということで取り組んできた。特にこれを見て頂いて1000万円以上予算が張り付いているのは、全部人件費です。支援員とか教師を増やすとか、人に費やしています。学校現場からすると、やっぱり人が欲しいですね。これを市がつけますよ、やって下さい、とやって5年6年経ってこのような結果が出たという身近な事例として挙げさせて頂きたいと思います。

○ある小学校の取り組みから

更にその次に、ある学校の取組を紹介したいと思います。A小学校としますが、この小学校は団地の学校です。万博が終わった後の丘陵地帯を切り開いてそこに学校を作りました。千里ニュータウンと同じですが、一番多いときで1000人以上の児童がいました。今は170人に減っている。そんな学校です。ある年代から公営住宅に中国の人が入るようになってきた。数%が外国籍児童です。私が初めてご縁を得させて頂いたのは、8年くらい前です。この町は、府下でも生活がとても厳しい、就学援助率も最高水準くらいでした。でも、地域とのつながりで非常にユニークな取組みをしておられます。具体的には土曜日に地域の方が講座を開いて子どもたちが自由にやってくる。今、わりと大阪はいろんな校区でそういう取組みをしています、その走りだと思います。私が行ったのは8年前ですが、それを遡ること5年前くらいから取り組んでいます。地域の方と連携して子どもたちを健全に健やかに育てましょうということで私が訪問させて頂いたのがきっかけです。ただ、外国籍の子がたくさんいる。生活が厳しい。課題を抱えている子がたくさんいる。学力的には市内で一番しんどかったです。そういう状況が続いて、私の目から見ても「この学校の先生、頑張っているけれども、なかなか数値ではしんどいで」と心の中では思っていました。が、先ほど見た茨木の数値と同じかそれを上回るぐらいの勢いで右肩上がりになっていて、去年の6年生、今年の6年生は全国平均を上回るぐらいの結果になっています。これは、我々研究者の常識を超えて突き抜けたという事例かなと思います。

1月3日の朝日新聞をご覧になった方もおられるかもしれません。この小学校の記事が朝日新聞の記事に載っています。「一人も見捨てへん」というリードの文があって、記事が載っています。すばらしい学校だなと思います。どんな取り組みをしているか、この間、私が主催している研究会にこの学校の先生に来て頂いて発表して頂きました。5点にまとめておられました。1点目は授業です。授業づくりです。これについては毎日先生が授業についてどこかで話が進めている。全体的に先生方が非常に若いです。四條畷の学校も同じかもしれません。教室を回りますと授業の力量という部分では秋田や福井の先生に比べるとまだまだかなと思いますが、先生方の熱意やエネルギーに溢れ、いろんなところで話が始まっています。毎月1回は必ず授業研があるということです。

やっぱり特筆すべきは、私の元同僚で、現在は学習院大学に行かれた佐藤 学さんという名前の知られた教育学者がおられて、「学びの共同体」というのを展開しておられます。A小学校では、その上にあるB中学校区を含めて校区でこの10年来、学びの共同体をベースにした授業づくりというのをやっています。コの字型で座るとか4人班の共同学習を必ず授業の中に入れるとか、形としてはそういうものです。

何よりも、私が非常に力になると思うのは授業研のやりかたです。授業を見られないときにはビデオに撮っておいて、皆で一緒にビデオを見て、授業について感じたことをその場にいるすべての先生が発言していくという方法です。「Aちゃんがここでこういうことを学べたね」とか「Bちゃんの学びがこういうところでストップしたね」、一人ひとりの先生が一人ひとりの子どもがどういうふうに学んでいるか又は学べていなかについて意見を重ねていくというスタイルの授業研をやられています。それでおそらく飛躍的に若い先生の授業を見る目が伸びているのではないかと思っています。

2点目は基礎学力の保障です。これもいろいろあるんですが、この間授業を見て素敵やなと思ったのは、先生方が自作の詩を集めた詩集を作っておられます。「響きあい」という名前の冊子です。これはなかなかいろんなタイプの詩を集めています。授業でも使っておられましたけれども、これを子どもたちに暗唱させる、全校で。週に1回、暗唱したのを先生方に聞いてもらってスタンプを押してもらう。週に1回には、職員室が子どもたちでゴった返す。いろんな子どもが聞いて聞いてとやってきて先生方がスタンプを押す。非常に活気のある風景です。このように子どもたちを育むいろんな仕掛けが、基礎学力を支えるための工夫が随所に散りばめられているということです。

3点目は、外国人の子どもたちの支援です。20名ぐらいおられるのでしょうか。中国の子が中心ですが、大阪大学が近いので大学院生の子どものとかそういう場合もあります。パンダ教室という名前の教室を放課後に開催して、外国籍の子どもたちの居場所と学力補充を毎日やっておられます。今も言いましたように、学力を補充する部分と居場所の部分、これも歴史が長いですので非常にうまく機能してます。その学校に長く勤められて60歳で定年になられた方が、講師として採用されてお手伝いをするような姿もあります。

4点目は、生活習慣の指導ということです。これは小学校であれば各校でやられていると思いますが、生活振り返り週間というようなものですね。これをA小学校では年5回、かなりしつこくやっています。放っておくと生活のリズムがなかなかできない家庭の子どもがたくさんいますので。あとは、給食の後に毎日一斉に歯磨きをするとか、なんとかりズムを形作るための工夫をしています。

5番目には、校区を越えた連携というのが語られました。B地区のBネットと通称で呼ばれています。実はわれわれの大阪大学の志水研究室も7年ぐらい前からこのBネットに入れて頂いて活動を一緒にしています。そのBネットの主な活動としては2つありまして、1つは年1回のフェスタが中学校の校庭や体育館でかなり賑々しく行われます。そこにはいろんな地域の諸団体が関わっています。四條畷にもあるのではないかと思います。もう

1つは年5回の合同授業研、3校合同授業研と言います。そうした取り組みの結果、ぐっと学力が上がってきました。従って言いたいことは、秋田に学ぶことは大切ですが、大阪は大阪の土壌に根差した改革をしていかなければならないということです。その一つのいい例として茨木市を参考にして頂ければありがたいです。

○質問に答えて

・「学力とは何か、これから必要な力は何ですか？」

残った時間は、ご質問にお答えするというので、先生方から既に質問を頂いております。私は大きな話をするのが得意ですので、大きなテーマについて時間がある限り2つ3つお話をさせて頂きたいと思います。それを話の締めめに代えたいと思います。

最初は、「学力とは何か、これから必要な力は何ですか」という、おおきな質問を頂いています。学力とは何か、学力の樹であると去年はお話をさせて頂きました。これから必要な学力は、私は基本的に変わらないと思いますが、でも時代に即してバージョンアップしていく必要はあると思います。皆さんご存知の国際学力テストPISAというものがあります。これはOECDという国際機関がやっていて、そのOECDの学力観を私は最初に見た時によくできてるな参考になるなと思いましたがそれをお伝えします。OECDの学力観については、これは産業戦士を作るものだろうというような批判も片方あります。経済成長するための問題とちがうのかという意見もありますが、私は必ずしもそうは思いませんので紹介します。3点です。

これから生きていく上で必要となる力、1つは道具を自由に使いこなす力。英語を日本語に訳すとそう言うふうになります。道具って何かと言いますと、言語です。言葉。数字も含めて言葉。もう一つ大きなものとしてはITです。インフォメーションテクノロジー、コンピューターということです。ただそれだけではなく、いろんな道具を手にとっているいろんなものを作ったりすることも入っています。子どもたちがいろんなツールを自由に使いこなせるようになることが学力の重要要素だと。そしてその基盤には言語の力とITの力がある。そういう学力観です。

2番目には、自分で考え行動する力です。これについては先生方であれば、もうそんなことはわかってる自明のことと言っていいと思います。しかし、特に日本人を振り返って見たらどうでしょうか。本当に自分の頭で考えて自分の判断で動ける人はどれぐらいいるのでしょうか。そういう話になります。これは言うまでもないことですが、改めて重要な項目として挙げられています。

3番目が、私が一番気に入っているのですが、多文化の中で自らの役割を果たす。私なりに英語を日本語に訳しますとそうなります。多文化状況の中で、自らの責任を果たすとか自ら貢献をするということです。社会の中で貢献をする、役割を果たすというのは日本の中で重視されてきたことです。ちょっと脱線するかもしれませんが、福井の教育を見ていて、今まとめているのですが、書くかどうかは別にして、ぱっと思い浮かんだ言葉が「群れる力」というものなんです。福井は「群れる力」を育ててるなということです。もともと人間は動物ですから群れます。群れるっていうことは今の日本でどちらかというとネガティブに語られることが多いです。先ほども私が言ったように、本当に自分の頭で考えていますとか、長いものにまかれるようなことになっていませんかと言った時に、「群れる力」は良くて、自分で考えて自己実現のために生きるんだとか言われたりします。そうも言えますけれども、私は人間として集団で動いていく「群れる力」も必要と思うんです。都市部においては、その「群れる力」が非常に揺らいでいる。子どもだけではなく親です。若い保護者の方の育ちからしても、群れを離れて小さいユニットで生きてきたので、

そういう高度経済成長期以後の世代が今の子どもたちの保護者になっておられるんですね。いいか悪いかは別です。でも、歩調を合わせて何かを何とか、集団の中で適切な行動をとるといのがなかなかできない場合も多い。でも、福井の中ではその形がきちっとある。爺ちゃん婆ちゃんえらいです。そのもとでお父さんお母さんが、上を立てることもできる、そういう部分で必要なんじゃないかなと思ったりします。ちょっと脱線しましたが。

OECDの学力観の大事なところは、そのときにその集団が見知った自分らの馴染みの人たちだけではないよ、いろんな人がいるよ、いろんな顔、眼の色、いろんな言語、いろんな価値観の人が混ざり合っているのが今の世の中で、その中で適切に役割を果たせるかということが問われている。私はその通りだと思います。それに基づいていろいろな国際的な機関の動きがあるということです。日本の教育もその部分は、あまり強くない。強くしていかなければならないなと思います。

・「学力向上の先に何があるのか、力のついた生徒にどんな世の中を作らせたいのか？」

もう1つ2つ質問があったんですが、さらに大きなものとして、「学力向上の先に何があるのか、力のついた生徒にどんな世の中を作らせたいのか」という質問です。本気で答えたいと思いますが、私は世の中を変えていくのは学力のある人間だと思っています。私はかつて東京大学に勤務したことがあります。東京大学は偏差値が一番上ですから一応学力が高い。しかし、かつて「無邪気で危険なエリートたち」という出版物が出版されました。20年ぐらい前です。偏差値だけが高くてもな、という問題提起だったと思います。そういう側面は、ないわけでないと思います。

逆に、私は11年前に大阪に帰ってきて、非常に学力保障で成果を挙げている松原市の小学校・中学校にしょっちゅう行かせて頂いたことがあります。今も付き合いがあります。その中の学校の校内研で私は以前言いました。「是非、この学校から東大に行く人を育てて下さい。ここで仲間を思う気持ちをつけた人間こそ行ってほしい、そういう人にこそリーダーになってほしい」という私の願いを告げたことがあります。学校の役割は、学力と社会性を育むことだと思っています。両方兼ね備えた人間に社会を創って行ってほしい。兼ね備えていない人も社会を創っていきますが、リードするのはそういう人だと思っています。かつての論争ですけれども、文科省が確かな学力と言った、一方で教職員組合は豊かな学力と言った、その対立がずっと日本の教育界であります。私は、学力は一つだと思います。確かな学力、豊かな学力があるわけではなく、学力は学力です。それをどういう目的に使うかが社会性、人間性の領域である。バランスよく兼ね備えた人間を創って頂きたいということです。と、つよく思います。

まだ話したいことはありますが、時間がきていますのでこれで終了させて頂きます。この後のシンポジウムにも出させて頂けるみたいですので、付け加えがあればしゃべらせて頂きます。どうもありがとうございました。(完)